

## 1. 流域の概要

江の川は中国山地のほぼ中央を貫流して日本海に注ぐ「中国太郎」と異名を持つ中国地方最大の河川で、その流域は広島・島根両県に属し、幹線流路延長 194.0 km、流域面積 3,874 km<sup>2</sup>である。江の川本川は上流を可愛川と呼び、広島県山県郡大朝町阿佐山（1,218 m）に水源を発し、広島県北部の 400～600 m の隆起準平原と 200～400 m の丘陵地を流れて三次盆地に入る。そこで馬洗川・西城川・神野瀬川を三方より合流し、流路を西に転じて県境の脊梁山地を先行性の峡谷をつくって流れ、島根県に入って江の川となる。出羽川を合流しながら北流し、邑智町において大きく屈曲して西南に向い、河口に近づくにしたがって桜江町のあたりから徐々に流れを西に向け江津市において日本海に注ぐ。

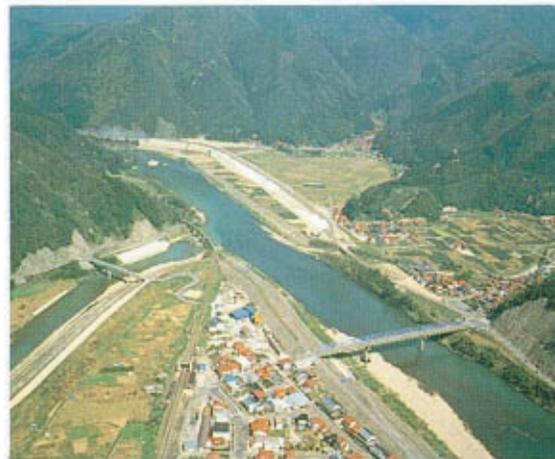
流域の地形は、上流部は中国脊梁山地と南部の低山地に挟まれた方形に近い標高 400～600 m の隆起準平原で、中流部は江の川が中国山地脊梁部を屈曲しながら横断する区間で先行性流路を形成し、兩岸の谷斜面は急峻で谷底平野が狭隘である雄大な幼年期の峡谷となってゆったりと流れている。下流部は石見高原と呼ばれる隆起準平原が発達している。また河口には三角州は発達していない。このように江の川は三次盆地を含めて上流と下流で河川の形状がまったく違う。上流域は谷底平野を伴いながら丘陵地や準平原の上を流れるのに対し、下流部は峡谷を形成し、兩岸には急峻な山が立ち谷底平野はほとんど発達しない。上流の勾配は 300 分の 1 のから 700 分の 1 で部分的には 90 分の 1 であるのに対し、下流部は 1000 分の 1 から 1600 分の 1 と緩くなっている。

流域の地質は流紋岩と花崗岩を主とし、本川上流域と邑智町付近に花崗岩、中・下流部が流紋岩から成る。西城川・馬洗川流域には古生層および安山岩が発達しており、河口部においては三郡変成岩に属する結晶片岩が存在する。

流域の気候は上流部の中国脊梁山地沿いでは気温と降水量から見て中国山地型



江の川河口



八戸川合流点付近

および山陽型に属しており、気温が低く年平均気温は11～12℃で冬季の積雪量は1～2mに達し、年降水量は2,000mmを越え、これが江の川の豊富な水量をささえている。一方、日本海沿岸部の河口付近は山陰型に属し、年平均気温は15℃程度と温暖で、また年降水量は約1,700mmとなっており、中国脊梁山地沿いと日本海沿岸部とではかなり差がある。

流域の約78%は森林が占め、農耕地は上流部の本・支流沿いと下流部の狭隘な谷底平野に分布し、流域の17%を占めるに過ぎない。また、集落は河口部の流砂堆積地と上流部の沖積地および谷底平野に立地している。流域内に大都市はなく、広島県三次市・庄原市、島根県江津市が挙げられるのみである。

流域の主な産業は農林業であるが、零細経営が多く生産額は低い。三次・庄原は比較的強い商工業機能牽持ち、小規模な商圈・生活圏を形成している。江津市は石見臨海工業地帯の中心地となっており、パルプ・窯業を中心とした工業活動が行われている。

流域の自然環境は、西城川水源地帯の吾妻山から道後山に至る一帯が比婆道後帝釈国定公園に、また県境の羽須美村から邑智町に至る江の川本川一帯が江の川水系県立自然公園に指定され、自然が織りなすすばらしい景観を展開している。